

No. 1027

古 都 の 秋

—鎌 倉—

古寺に咲き乱れるハギ・ケイトウ、鶴ヶ岡八幡宮大祭や数々のルドンの名画——

9月最初の連休に、鎌倉は20万人を越す行楽客で大にぎわいです。出店に群がる子供達の人気の的は「カメすくい」のようです。古寺巡りのグループも多く、八幡宮では幸運のオミクジが飛ぶような売れ行き。

一方、境内にある鎌倉近代美術館ではルドン展に長い行列ができました。19世紀後半のヨーロッパ外光主義の中でその対極に立ついわば内光主義の代表者オディロン・ルドン（1840～1916）。館内には彼独得の闇と光の交錯する空間の中で大きな目玉や生首が浮動する悪霊的幻想があますところなく展示されています。秋の深まりゆく古都はこしばらく人波と車ではちきれそうです。

軽老社会

ポ ッ ク リ 信 仰

吉田寺（ポックリ寺）住職——「9月15日敬老の日で、お年寄りにとっては楽しい一日でした。しかしあとの364日は、これは敬老は敬老でもうやまいと違う。車へんがついている。軽いという字の軽老ですわ。

ある農家のお嫁さんはお年寄りのことをどういうたか「年寄りは 半分あけた米俵 口は軽うて尻の重たさ」平均寿命がまたのびて世の中だんだん高齢社会に向かっている。老人福祉法が施行されて今年でちょうど10年。しかし、福祉の手はのびずほとんどの老人はおきざりにされたままだ。寂しい生活不安な老後、そしてやがて迎える死。死ぬ時ぐらいいは、安楽にと願ひポックリ寺にかなわぬ足を運ぶ。奈良県生駒郡斑鳩の里にある清水山吉田寺。1300年前、天智天皇の勅建で恵心僧都が開いた念仏寺である。阿弥陀さまに下着の御祈禱をうけると、腰シモ・スリの病氣や世話にかからず安楽往生ができるという。長いきはうれしいはずなのになぜか老人の顔は寂しく暗い。老人対策は最近になってようやく真剣に考えられはじめた。千葉県松戸市。ここの市役所には「ながいき課」ができた。老人がながいきしてもらうためにお手伝いする課ですと課長はいう。そして敬老の日、課長自ら町へ出て、市内の90才以上のお年寄りに感謝状と記念品をおくった。うけとる老人は無表情だ。老人対策の多くが老人を弱い者として保護するという姿勢だ。老人ホームでも、ほとんどがヘルパーの世話にまかされている。その中で、老人はだんだん口を閉ざしていく。

念仏を唱え、御祈禱をすませたある老女は「別に長いきしたってね……」とさびしく笑う。又ある老女は「いやな世の中ですわ。今としては年寄りも若い人も大変ですからね。それであんまり子供にめいわくかけずにポックリいきたいと思っあ今日お世話になりました」と語る。

寝たきり老人にお小使いが役所からおくられた。霊前にかざってあるだけ。この老人はどうやって使えばいいのか。老人は必死に念仏を唱え木魚をたたく。

老人をこんなにまで安楽死にかりたてるものはなんだろうか。